

「ゆとり教育」

教育に関わる私見の一端は以前にも何度か申し述べました。大学生の学力低下とよく言われますが、多くの大学はもはや「大学」ではありません。日本の根幹の問題は幼児の健全な「育成」（「教育」ではない）にあります。あいまいなことや自分が出来ない分からないことに我慢ならない感情が、むずかしそうに見えることにもぶつかって行く知的肉体的エネルギーの基ですが、そういう感情さへ育っていません。物事を「納得して」自分で理解する（幼児にあっては理解の内容が間違っていることもがあってもかまいません）エネルギーを助成するのです。本来ゆとり教育の「ゆとり」は、納得理解する時間を許容する事です。元から納得理解する精神に欠けていることを認識せずに時間だけ与えても、時間は無為に過ぎるだけです。程度の低い学科カリキュラムをつくっても、理解を助けることにはなりません。考えて理解するという精神（能力どころか）がないからです。このような幼児は、なんのことはない親の申し子です。職種学歴をとわず、そういった親があふれています。

学童を一律に低いレベルの学科カリキュラムの中に投入すれば、少ないかも知れないけれども健全に育ってきた子供の伸びる芽さへ摘んでしまうでしょう。大学生を上下二分化することが必須であるように、学童さへ二分化する羽目になるかも知れないとはいへ、一律に基本はゆるまず身につける学科カリキュラムを用意して、真の「ゆとり」教育（納得して理解する）を実践しなければならないと考えます。本来家庭で養成されるべきであった健全な精神を、いまさら学校で養成しなければ立ち行かない現状を、許容は出来ないが事実と認めざるを得ません。学校でのそういった「教育」は所詮対症療法でしかないかも知れませんが。学科は国語と数学が基本です。ことのほかこの2科目は質高く設定して十分な時間を投入すべきです。

（高等教育フォーラム 1999）